Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-03

山口誓子と無季俳句についての一考察 ： 大間知君来訪のメモを契機に

米田，恵子

(Citation)
日本文化論年報,28:35-48

(Issue Date)
2025-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100495749

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495749

山口誓子と無季俳句についての一考察
――大間知君来訪のメモを契機に――

米田恵子

1．はじめに

大間知君（大正七―平成一九（1918-2007））は、平成二〇年七月から始まった「『京大俳句』を読む会」の『会報第三号』（平成二七年）に掲載された、原知子氏の「『鳩舎』を読む」に紹介されている。『京大俳句』は、昭和八年一月創刊された新興俳句の俳句誌である。筆者も『京大俳句』を輪読する「『京大俳句』を読む会」に第一回から参加し、大間知君等の大阪府女子専門学校（以下「女専」と略す）の女子学生たちが、『京大俳句』に投句しているのは知っていた。同じ女性として、まだ女性の大学進学が限られた大学にしか許されていなかった時代の女専は女性の最高学府であり、そこで学ぶ人たちがどのような俳句を詠んでいたかは興味が惹かれるところであった。『鳩舎』は昭和一四年三月に刊行された女専俳句会の句集である。

この女専俳句会は、昭和一一年、国文国史学科の教授浅田善二郎が中心となり誕生した句会で、大間知君も参加し俳句を始める。しかも、浅田善二郎を俳句の道に誘った井上白文地も指導していた。

このような女専俳句会で活動した大間知君は、卒業論文に『山口誓子論』を書いて提出しているのである。また、卒業論文を書く前に大間知君は大胆にも誓子の勤める住友本社も訪れている（注1）。神戸大学山口誓子記念館に勤める筆者にとっては非常に気になる存在であった。そんな中、最近、昭和一三年の山口誓子の句帖である『誓子句稿 第六十五輯』を調べる機会があり、そこに、「大間知君」の他二名の女子学生の名前が書かれていたのである。それは、昭和一三年七月二日の条であり、そこに「私の有季作品のなかに無季俳句精神を見るといふ」という非常に意味深長なる文が書かれていた。

誓子はいわゆる有季定型の俳句を作り続けたのである

が、この時期、無季俳句についての論争に関与していた誓子にとっては、一女子学生の大間知君の言葉とはいえ、少なからぬ衝撃を受けたことは間違いのないことだと考えられる。本稿では、大間知君の『山口誓子論』から、山口誓子の無季俳句について考察したい（注2）。

2．大間知君と『京大俳句』

大間知君は、広く知られる俳人ではない。大阪府女子専門学校国文国史学科の昭和一四年の卒業論文に「山口誓子論」を書き、大阪の三津屋小学校に奉職した。この大間知君が俳句を始めるのは、前述のように、昭和一一年、国文国史学科教授の浅田善二郎が中心となり句会が生まれたときである。それから一年後、『京大俳句』に女専俳句会の作品が昭和一二年六月号の一般会員の投句欄である井上白文地選の「三角点」に載る（注3）。句会が誕生して一年経っての掲載であり、句会出席者も安定し、徐々に力も蓄えられてきたからであろう。

春逝きぬ少年の面やつれつゝ
叱られて出づれば雲のきれ遠し

大間知君の俳句は上の二句であるが、同時に女専俳句会からは他に六名の句が上がっている。さらに、井上白文地は「選後の言葉」のなかで、女性の句は素直であって男性の俳句のようにヒネリがなくてよく、それは感動を素直に打出して来るためだろうとし、「所謂新興俳句らしいところはないが、傳統俳句らしいところもない。むしろかういふものゝ成長するところにこれからの新興俳句の一つの途があるのだと思ふ」と述べる。自分が指導する女専俳句会の女性たちの活躍を期待するものである。また、ここで当時対立関係にあった「伝統俳句」と「新興俳句」を前面に出しているところも興味深い。

こうして大間知君や女専俳句会のメンバーの井上白文地選の「三角点」への投句は続いていくのだが、大きく女専のメンバーが登場するのは、女性俳人七名による「私の好きな句」という特集（昭和一三年一月号）に、大間知君（君子）（注4）、樋口喜美子、河原君子の三人がそれぞれの「好きな句」を挙げる。この三名の名前は、本論の「1．はじめに」で紹介した誓子の句帖に書かれていた大間知君の他二名の名前である。女専俳句会でも注目される三名だった

のだろう。大間知君の「好きな句」は、卒論に山口誓子を取り上げるだけあって、誓子の「清水谷」と題した二句を一番最初に示している。「薔薇熟れて學課けだるくなりまさる」「ばら垣や間(あひ)の休みのときのほど」を挙げ、これらの句は、いつもの誓子作品に見られる強い男性的な剛快な力強い線をもって迫ってくる作品ではないが、感傷的な感じがすると大間知君は書く。「清水谷」は清水谷高等女学校を示し、誓子の宰相山の住まいに近く、妻波津女の母校でもあった。通勤のときにそばを通るため詠んだ句である。また、大間知君の母校でもある。「清水谷」という響きに懐かしさを覚え、真紅のばらが匂う校庭に友と学びたわむれ、歌い過ごした日々が思い出されると大間知君は述べる。誓子の俳句をもとに懐かしい母校と少女時代の思い出がみずみずしく語られる。

一方、樋口喜美子は、新興俳句から北垣一柿・西東三鬼・水原秋櫻子の近作をあげるが、秋櫻子に関しては、「最近の氏の作品は私には氣にくわないものが多い」と述べ、「ついでに一番嫌ひなのは最近の山口誓子の作品だ。古いものゝなかではいゝのがあるのだが、このごろのは實にいやだ」と率直すぎるくらいに意見を述べている。河原君子は、好きな句として芭蕉の句をあげ、同級生の橋本雅子の「英霊しづと歸る大地に鬨(とき)の聲」「弔旗寂地(つち)を壓して生くるもの」の二句を挙げる。日中戦争（昭和一二年七月七日）も始まっている時期であり、時局を感じさせる。

この「私の好きな句」の特集で興味深いのは、樋口喜美子が最近の秋櫻子と誓子の句は嫌いだと、特に誓子の句について言い切っていることだ。嫌いな理由にはふれられていないので、推測するしかないが、おそらく「ピストルがプールの硬き面にひびき」「夏の河赤き鉄鎖のはし浸る」のような新興俳句として新しい素材を開拓し、新しい表現を使った四・五年前の俳句に比べると、最近の誓子の俳句には精彩が欠けるということなのだろう。まだまだ女性蔑視的な風潮が存在する世の中において、秋櫻子や誓子への評は『京大俳句』の自由さがうかがえるところでもある。しかし、実際には、『京大俳句』内で、例えば井上白文地を始め、浅田善二郎や平畑静塔が無季俳句を作らない秋櫻子や誓子への批判を口にしていたと想像できる。まして、身近にいる山口誓子には、なぜ無季俳句を作らないのかと迫っている京大俳句の面々を思い浮かべることができる。大間知君も当然その影響を受けていると考えられる。

このような状況下で、大間知君は昭和一三年七月二日に、誓子を実際に訪問し、一四年三月に提出する卒業論文『山口誓子論』を書く。

さて、山口誓子に「私の有季作品のなかに無季精神を見るといふ」と句帖に書かしめた大間知君との対面について述べるが、具体的にどんなことが話されたのかを知りたいものである。しかし、誓子の句帖に書かれたものだけでは十分とは言えないので、大間知君の『山口誓子論』を読み解くことが重要と思われる。誓子との対面で、何が話されたのか、話題になったのは何か、その手がかりを得たいと考える。次章において、無季俳句論争の渦中にいた誓子にも少なからぬ衝撃を与えたと思われる大間知君の『山口誓子論』を見ていくことにする。

3．大間知君の『山口誓子論』

大間知君の「あのころ」（注1）によると、指導教官であった浅田善二郎から「現存の作家はやめなさいと注意されたのですが、我を通し、誓子を訪ね、全く勇ましい事でした。思い出すだけで恥ずかしさが先に立って、身の内が熱くなる思いです」と謙虚に反省する。二十歳の乙女の勇敢な行動である。伝統俳句ではなく、新しい新興俳句に魅了されたうえでの行動であったろう。現存の作家を取り上げた『山口誓子論』であるが、単純な印象批評に終わっているところが無きにしも非ず粗削りなところもあるが、そこを修正すれば、『山口誓子論』として『京大俳句』に掲載されても通用するものと思われる。

『山口誓子論』は三章に分かれている。

一、序論
二、誓子の社会性ある素材について
三、誓子と季

「一、序論」では、俳諧の歴史を芭蕉から筆を起こし、誓子の最近の著書や『土上』の東京三の論攷を引用し、単なる思い付きではないということを裏付けている。

「二、誓子の社会性ある素材について」は、社会を詠った誓子の俳句を抜粋し、それぞれに説明や鑑賞を書いている。前述の「私の好きな句」（『京大俳句』昭和13年1月号）の明確で分かりやすい文章から言えるように、その文章力は確かである。

この章では、平畑静塔の「一つの関心―山口誓子の社会性ある俳句について―」（『京大俳句』昭和九年一二月号）

に基づいて論が進められているのは明らかである。平畑静塔の論旨は、誓子の社会を素材にした俳句には、決して思想性や階級性などイデオロギー的なものは認めらないが、新興俳句の多面的に現実を描く方法ともいえる連作という手法を駆使し、社会を描いている。そして、その詠み方は、社会性ある題材を客観描写によって描くものであり、これはありのままに描くという自然主義的手法に近く、社会の一側面が描かれているということである。大間知君はこの静塔の論旨に沿って、静塔が挙げた誓子の社会を詠んだ連作俳句を例に取り入れながら進めていく。

その中で、筆者が興味を惹かれたのは、誓子句の「商館の感傷」と「新社員」の連作についてである。これらは、静塔の評論には取り上げられていない連作であり、大間知君自身の感想から書かれたものである。「商館の感傷」は、風邪気味であっても生活のために出勤するタイピストを詠んだ俳句である。「目つぶれる瞼や風邪のタイピスト」「樺色の頬紅風邪のタイピスト」などの句である。大間知君は、吉岡禪寺洞の評を引用する。それは、誓子のタイピストの句と日野草城の「タイピスト倦めり日焼けの腕長く」と比較して、草城の句の方がいいと吉岡禪寺洞は絶賛するものである。しかし、大間知君に言わせると、禪寺洞は誓子句の「樺色の頬紅」を見逃しており、この「樺色」に風邪をひいていても常に美しい外面を保って仕事をしなければならない苦痛が表現されていることに気づいていないと指摘する。これを見逃さなかった誓子の鋭さを大間知君は見抜いている。女性ならではの指摘であり、筆者も誓子のタイピストの句に共感するところである。

また誓子の「新社員」と題する連作の「新社員背廣を着つつ年少き」「新社員日々商人となりゆける」の句は、学窓から旅立ち、大人の社会へ踏み出した希望と困惑が詠まれ、現代社会の一スケッチの秀作と大間知君はとらえている。まさに、大間知君も卒業を控え、社会に出る準備をしている最中であり、タイピストの句と同様に新社員の気持ちがわかるのであろう。このような若者らしい感覚から素直に評しているところも筆者の共感するところである。

そして、大間知君の卒論の中心は、分量から言っても、「三、誓子と季」である。「季」については、誰かの説をほとんど引用することなく、誓子の「季」についての考え方を引用するのみにとどまり、多くは自分の意見と思えるが、しかし、おそらく井上白文地や平畑静塔ら「京大俳句」の

先輩たちが日頃論議していたことではないかと推測する。

まず、大間知君の属する「京大俳句」と誓子の関係について述べると、「京大俳句」は新興俳句運動の結社の一つであり、新興俳句は無季俳句を作るようになり、「京大俳句」も無季俳句を認めるようになった。そのため、あくまで無季俳句を作らない山口誓子は、昭和一〇年「京大俳句」の顧問から一般会員になり、「京大俳句」から距離をとる形になった。こうして誓子は無季俳句ではなく季を俳句の一つの要素として実作を続けていくことになる。これは「ホトトギス」を辞めた時と同時期である。大間知君は、そのような誓子の考え方が表れた「胴体の言葉（一）」（『馬酔木』昭和一〇年一〇月）に注目する。これをまとめると、誓子は俳句を生活者である人間が、その生活に入り込んで来る季節を詠いあげる詩（十七音季感詩）と定義し、季節は「自然」に示現された形においても「生活」に反映した形においても存在し、このとき「自然」と「生活」は同価であるとも誓子は述べる。ここから大間知君は自然感情も生活感情も同価値であり、一歩進めて今こそ「人間性」や「社会性」を追求するときであると言う。これは、まさに新興俳句の考え方であり、無季俳句の発生の一つの要因となった考え方である。

この昭和の初めにおける無季俳句流行のきっかけは、当時新興俳句の間で用いられた発表形式である連作俳句から、季語が続くのは冗長になるため、連作の中に無季の俳句が混じっても差し支えないという考え方から始まったのである。そこから人間や社会を詠むには季語にこだわる必要はないという考えが派生した。誓子は、先に述べたように、俳句は生活者である人間が、その生活に入り込んで来る季節を詠いあげる詩と述べ、さらに季節は「自然」のなかに詠まれても「生活」のなかに詠まれてもそれは同価値だという考えであり、誓子は「ホトトギス」を辞して「馬酔木」に入ったのは新興俳句の考え方に賛同したからにほかならない。そこから、大間知君は誓子の俳句論を進めていけば無季俳句を作ってもいいのではないかと考えたようである。

そのため、誓子に面会したとき、「1．はじめに」で述べたが、句帖に書かれているように、「有季作品のなかに無季俳句精神を見る」と率直に話したのであろう。これに対する誓子の反論は、次章で述べる。

ここで、もう一度大間知君の卒論にもどるが、その結論

は、誓子の句も押し詰めていくと、無季俳句になるのではないか、誓子が無季俳句の道を進むようになることも俳壇には何かをもたらすのではないか、季語必要論を改めてもよいのではないかというということである。この結論に達するまでの例証として、誓子の「渤海を大き枯野とともに見たり」「枯れし木と激戦の時の壁立てり」「塹壕はあさく今年の草も枯れぬ」を挙げる。これらの句の「枯野」「枯れし木」「草も枯れぬ」の季語は俳句の中では生き、必然的にこの季語以外には考えられないとしている。しかし、誓子の句の中にも、この季語でしか表現できないというのではなく、単に季節を明示するためだけに用いられ、必然性がない句があると指摘する。

例えば、「獄凍てぬ禮儀廉恥と房わかれ」「われ等この機翼にたよれり枯野黄に」「哈爾濱の枯野上空の路しげき」の句の「獄凍てぬ」「枯野黄に」「枯野」はその句に何の効果ももたらしていないと言う。これらの三句は満洲出張の折りに詠まれた句である。確かに「獄凍てぬ」の句に詠まれたのは奉天第一監獄であるが、その場所との必然性、あるいは後の二句は飛行機に初めて乗った句と季節との必然性は認めにくいかもしれないが、これらは人によって取り方が違うとも言える。よく「季語が動く」と言い、どんな季語が来てもいいではないかという批評を受けたりすることがある。確かに必然性を認めにくいところもあると言えるかもしれないが、読む人によって受け取り方が違い、大間知君の批評は印象批評的なところもあると言えなくもない。

また、「初冬醫家」と題のある「美きひとの後吸入をせんとする」「吸入器この醫家午の麺麭を燒く」の句でも、「吸入器」は冬の季語であるが、「醫家」なので年中あるものである。だから、「吸入器」という季語は必然ではなく、「麺麭を燒く」から冬ではなく秋を連想すると大間知君は述べる。さらに、「ダイヴィング」という題のある「擴聲器プールに低き私語をする」「ダイヴァが白き鐵塔攀ぢのぼる」「ピストルがプールの硬き面にひびき」の句は、プールやダイヴィングと「私語をする」「白き鉄塔」「硬き面」という表現が秋を思わせると言う。これも、秋を連想するのは大間知君の個人的な感想であり、だれもが認めるとは言い難い。大間知君も卒論の最後にきて、力が尽きた感は否めない。

このように、卒業論文であるため、未完成で粗削りなところもあるが、大間知君はこの卒業論文を書くにあたって、

意を決して誓子に会いに行ったのは事実である。では、うら若い女性に「私（誓子）の有季作品のなかに無季俳句精神を見るといふ」と言われた誓子の反応はどうであったのか。次章では、句帖に書かれたメモを見ていくことによって、誓子の無季俳句に対する考えにふれてみたい。

4．誓子の大間知君との対面とその反応

まず、誓子の句帖である『誓子句稿　第六十五輯』の大間知君が住友本社を訪れたことが分かる個所を引用する。

大間知君子
（樋口喜美子
河原君子）

七、二　私の有季作品のなかに無季精神を見るといふ。
　　その日　サアプラスである
大間知君子
　　來る

【本稿では「大間知君」に統一したが、『誓子句稿』には「大間知君子」とあるのでここではそのままにした。】

大間知君が誓子に会うため、住友本社を訪れたのは、「七、二」から昭和一三年七月二日であることが分かる。誓子の句帖には、七月二日という日付の前に、「大間知君子、樋口喜美子、河原君子」の三人の名前がある。おそらく、女専俳句会の指導者である「京大俳句」の井上白文地の仲介によって、面会に行く日が決められたのであろう。ただし、大間知君以外の二人の名前はカッコでくくられていて、七月二日の日付の左横に「大間知君子來る」とあり、実際に来たのは大間知君一人であり、あとの二人は来なかったということが示されている。前述の大間知君の「あのころ」（『三角点』昭和四四年三月）に書かれてあることが事実であることが証明されたわけである。しかし、どうしてあとの二人は一緒に行かなかったのだろうか。たまたま二人に用事ができて行けなかったのか。あるいは、女専の学生にとって誓子は大俳人といっても過言ではないくらいの人に、直接会いに行くという大胆なことに、結局怖気づいたのではないだろうか。本論「2．大間知君と『京大俳句』」で、『京大俳句』における女専の俳人達の「私の好きな句」

という特集（昭和一三年一月号）を紹介したが、大間知君は第一に誓子の「清水谷」のばらの俳句を挙げているが、樋口喜美子は最近の誓子は嫌いと公言しているため、面会するのは憚られたのであろうか。大間知君は「住友本社へ一人でお訪ねした」としか書いていないため推測の域を出ないのが残念である。

そして、七月二日の日付の下に、「私の有季俳句のなかに無季俳句精神を見るといふ」と書かれているのである。さらに、その横には「その日　サアプラスである」と書かれている。まず、この「サアプラス」であるが、英語にするとsurplusとなる。「サプライズ」の間違いであろうか。「サプライズ」であれば「驚き」ということで、若い女性が一人で訪問し、誓子の有季俳句のなかに無季俳句をみると言われれば、「驚き」である。しかし、「サアプラス」と書かれている。「サプライズ」ではない。「サアプラス」であれば、「余剰、余り」という意味である。大間知君が訪ねてきた日は、誓子にとってはいい意味では「おまけ」ということであろうか。悪い意味では「余計なもの」と取れる。どちらにしても、大間知君の言葉は誓子に少なからぬものをもたらしたのは、確かなようだ。

次に大間知君の言に関連したことが出てくるのは、七月四日と日付が書いてある頁の次の頁から見開き二頁に渡って、次のような文が書かれている。

◎矛盾とは―

①無季理論家の　　無季作品に無季精
神の見るべきものなく、却って有季理論家の
有季作品に　無季精神　の見るべきもの
あるが如きをいふ

②俳句の本質をその十七音形式に見出すとも
その本質論によつて　過去の歴史を一気に　訂正する
塗り替へることは
出来ない

③無季俳句は新しい伝統の出發であって
俳句の正しき發展相ではない　　乗換

④無季的要求による無季作品ある
はこれを認める　しかし　それを俳句と呼ぶか否か

は別の問題である

⑤男の胃袋をその細君の胃袋とをつひに
同じ大きさに見てしまふ　誤謬

【①②③④⑤は、分かりやすいように便宜的に番号を振った。
③の間にある縦線はそこで頁が分かれていることを示す。】

断片的でアフォリズムのようなことしか書かれていないが、少なからず、大間知君の「私の有季作品のなかに無季精神を見る」という意見は誓子の無季俳句に対する考えを改めさせるほどの影響はないにしても、何らかの知的好奇心をとらえたことには間違いない。

大間知君の結論は、有季の俳句である誓子の作品の中には、この季語でないと俳句が成立しないという絶対的な役割を果たさない季語の句もある。また、そもそも誓子も人間や社会を俳句に詠もうとする新興俳句に属しているのだから、押し詰めていけば無季俳句になるということである。この大間知君の考えを取り上げて、誓子は①の文にあるように、無季作品に無季精神がなく、有季作品に無季精神があるように言うのは矛盾であると書いたのではないかと思われる。「私の有季作品に無季精神を見る」というのは確かに矛盾であるが、突き詰めていけばそうなるかもしれないという予想も成り立つ。しかし、誓子はあくまで有季俳句を作る。

次の②から大間知君との話の中で、おそらく、俳句とは何かということに及んだのであると考えられる。及んだというより、誓子はまず俳句とは何かという俳句の定義をはっきりさせようとしたのではないか。十七音という形式が一番にあるのは、大間知君も誓子も変わるところはないようである。「その本質論によつて過去の歴史を塗り替へることは出来ない」と書いているのは、誓子独自の考え方でもなく、「京大俳句」や「天の川」などの新興俳句の俳人たちも十七音定型を重視する。ただ、「過去の歴史を塗り替へることは出来ない」という文から、有季俳句にこだわる自らを「歴史派」と称する誓子を容易に思い浮かべることができる。

③において、誓子は「無季俳句は新しい伝統の出発であつて俳句の正しき発展相ではない」と書く。これについては、誓子の「胴体の言葉」やそれをまとめた形の「季題論序説―季に関するノート」（『俳句研究』昭和一一年三月）

に、誓子は、俳壇の状況を「有季俳句、無季俳句、自由律俳句」と峻別し、無季俳句は有季俳句の発展した形ではないという考えであり、現俳壇には、この三種の俳句が存在するということである。そのなかでも、誓子は無季俳句を二つの派に分ける。それは、有季俳句の存在を認め無季俳句を容認する無季容認派と季感を越えて詩感の立場に立ち有季あるいは無季俳句を作る超季感派の二つである（注5）。

④については、最後に述べることにし、先に⑤の比喩について述べる。

⑤の「男の胃袋をその細君の胃袋とをつひに同じ大きさに見てしまふ誤謬」で、急に男女の話が出てきて不思議に思われるかもしれないが、これは、「胴体の言葉　（三）」（『馬酔木』昭和11年2月号）において、誓子は、すでに「有季派――有季・無季の区別を男・女の性別ほどに思ひつめてゐる」と述べ、有季派は男女の区別のようにはっきり分けて考え、無季容認派の有季・無季の考え方は「ふたなり俳句」、つまり両性具有と言う。「無季俳句容認論を聞いてゐると、つまり妻だけを女と思つている――のが有季固守派で、妻だけを女とは思はない――のが無季容認派である」と述べている。ここで、男女の区別を例え話として使用しているので、「男の胃袋」「その細君の胃袋」という比喩を持ち出したのだと考えられる。それにしても、有季派と無季容認派に関しての比喩は分かりやすく興味深い比喩である。

ところで、この比喩の「男の胃袋」は有季俳句、「その細君の胃袋」は無季俳句だと読み替えていいであろう。したがって、「男の胃袋」と「その細君の胃袋」が同じ大きさだというのは「誤謬」だと誓子はいうのであるから、有季俳句と無季俳句を同じものと考えてはいけないということである。つまり、有季俳句と無季俳句は、季を明確に意識して作るかどうかという作り方が違うと誓子は考えるため、同じには考えてはいけないと大間知君に伝えたのではないだろうか。ただし、⑤にあるような男女の胃袋の比喩を使って、若い女性である大間知君に説明したかは疑問である。現在なら、ジェンダー論から言って、危うい比喩であるが、紳士で真面目な誓子は、この比喩を用いて説明しなかったと願いたい。

では、後回しにした④の「無季的要求による無季作品あるはこれを認める」「しかしそれを俳句と呼ぶか否かは別の問題である」に対して、この解答と言える文が『サン

デー毎日』（昭和一一年九月二〇日号）の「サンデー俳壇」に出ているのである。これは、大間知君のその卒論においても引用されているものである。誓子は、「天の川」の北垣一柿の無季俳句である「たそがれは路次の子供の眸から来る」「落日が子等の手足をよごしたる」の二句の鑑賞において、無季俳句として認め評価しているのである。その理由は、無季俳句の場合は詩感を量ってみることであると述べる。つまり、誓子は、無季俳句は有季俳句のように季感を含んでいないため、季感を量る必要がないように、無季俳句の評価は詩感が感じられるかどうかで決めると言うのである。北垣一柿の路次で泥だらけになって遊ぶ子供らを詠んだ「たそがれは」と「落日が」の句には、「詩感を認める」と誓子は評価するのである。まず、「たそがれは」の句の誓子の鑑賞を引用する。

たそがれは街に來て、路次に來て、子供に來る。しかしそれは誰かの視覺を待てばたそがれは視覺から來る。子供の眸からたそがれが來たといふところに、かすかながらこの作者の主知がある。さういふ主知的な傾向を認めるかどうかでこの無季作品の詩感が決る。私は認める側である。

筆者の個人的な感想になるかもしれないが、しっとりとした思いにさせる鑑賞文である。「落日が」の句の鑑賞文は次のようになる。

没り日のひかりが子供たちの手足にあたつてゐる。あの色づいたひかりは、それにてらされてゐるものに、「よごれが」といふ感じを與へる。私はこの詩感を買ふ。

このように、誓子は両方の無季俳句に詩感を認め高く評価するのである。無季俳句に詩感があるかどうかで評価するというのは、後に「覚書」（『馬酔木』昭和一二年一月号）にも、次のように書かれているのである。「無季俳句は一つの物理的存在として存在する。この事實は否めない。たゞしかしそれが文學的存在として存在するか否かは、それの含有する詩感の有無で決定される」と言明する。さらに「詩感のない無季俳句は無価値なものとして片つ端から抹殺しなければならぬ」とまで言い切るのである。

以上のように誓子と同時代とは言え、女子学生の卒業論

文を繙くことは無意味なことと思われるかもしれないが、筆者には誓子の無季俳句に対する考えの理解に役立ち、意義のあることだと思うのである。

5．おわりに

大間知君がその卒業論文で取り上げた誓子の無季俳句についての考えは、昭和一〇年後半から一一年であり、その後、昭和一二年七月七日に支那事変が始まり、俳壇では戦争俳句が盛んに作られるようになる。同時期、誓子の無季俳句についての考えは日野草城との論争へ発展し、誓子は、最終的には、東京朝日新聞（昭和一四年六月九日付）に掲載された「近ごろの俳壇について（3）俳句的詩精神」において、誓子は自分のことを「怯懦なる歴史派」と自虐的に呼ぶ。これについて、最近発見したことであるが、誓子は戦後「83 頴原先生のこと」（『天狼』昭和二五年九月号）の中で、この「怯懦なる歴史派」についてふれている。句集『炎晝』を出版した当時というから、昭和一三年九月以降のことであり、無季俳句について議論されていたときであるが、このとき、江戸俳諧の大家である頴原退蔵から長文の手紙をいただいたそうである。そこには「無季俳句を作らぬのは卑怯である。どうか無季俳句を実践して貰ひたい。自分は大いにそれを期待する」と書かれてあったそうだ。このように、誓子は頴原退蔵から激励の手紙をいただいたわけだが、誓子はあくまで無季俳句を作らず、自らを「怯懦なる歴史派」と称した。どうして自らを卑下したような言葉を使ったのか、その理由は「（頴原退蔵）先生に卑怯者呼ばはりされたことに対する一種の不貞腐れに他ならなかつた」と誓子は述べている。これにより、なぜ誓子が自虐的な呼称を使ったのか、その理由が分かったのであるが、ここに至るまでの経緯については、さらなる考察が必要であり、今後の課題としたい。

また、誓子は無季俳句に関連して、戦争を詠めるのは、新興無季俳句であると述べる。その戦争の結末を知っている現代の私たちにとっては、何という不遜なことを言うのだ、あるいは誓子にしては不用意なことを述べたものだという感想を持つ人も多いと思うが、そこに至る過程も興味深いところであり、稿を改めたいと考える。

注

（1）大間知君は、卒論に「山口誓子」を選んだが、その前に住

友の本社へ誓子を訪ねていったということを、「あのころ」（『三角点』第一六号、昭和四四年三月号）に述べている。これには、浅田善二郎や井上白文地の指導のもと、句会の様子なども書かれている。

（2）大間知君の卒業論文は現在大阪公立大学の図書館に保管されており、参照についてはご遺族の許可を得ている。

（3）「三角点」は、『京大俳句』の一般会員の投句欄「誌友作品」であり、昭和一一年一月号から「三角点」という名称に変わった。さらに、この「三角点」の主要メンバーで、大間知君や仁科海之介などが中心となり、昭和三〇年九月に『三角点』という俳句誌が創刊された。『京大俳句』は特高の取り締まりによる主要会員が検挙された「京大俳句事件」という不幸な事件により、昭和一五年二月号をもって終刊となっていた。『三角点』は戦後当時の会員が集まって同名の同人誌として創刊された。

（4）大間知君が本名であるが、これでは「おおまちくん」と男性への呼称と間違われるからであろうか、『京大俳句』への投句では「大間知君子」を使っている。誓子の句帖に書かれた名前も「大間知君子」である。しかし、本稿では本名の「大間知君（きみ）」で統一する。

（5）誓子は当時の俳壇を、まず大きく伝統俳句・新興俳句と分け、さらに新興俳句は有季俳句・無季俳句に分け、そのなかの無季俳句は、無季容認派・超季感派に分かれると考えている。誓子は、新興俳句の有季俳句派であり、これを歴史派と呼び、最終的には自分のことを「怯懦なる歴史派」と称する。